

平成20年12月1日

# 関東の森林から

第57号



国民の森林・国有林

関東森林管理局

前橋市岩神町4-16-25

TEL (027)210-1158

FAX (027)210-1159

<http://www.kanto.kokuyurin.go.jp/>



## 初冬の五頭山と白鳥

〈新潟県阿賀野市（旧笹神村）〉

（撮影：下越森林管理署 佐々木達也）

## 美しい森林づくり

効率的な作業システムの普及と間伐材の利用拡大

販売課 課長補佐 神長 茂

## 私の視点

天城山の懐に抱かれた「昭和の森会館」

昭和の森会館 支配人 土屋 和代氏



広報「関東の森林から」は、日本の森林を育てるため間伐材を使用しています。



# 美しい森林づくり

## 効率的な作業システムの普及と

## 間伐材の利用拡大

販売課 課長補佐 神長 茂

関東森林管理局では、地球温暖化防止対策として間伐を積極的に進めるとともに、針葉樹と広葉樹が混じった森林や伐採までの期間を通常の倍程度とする森林の造成など多様な森林づくりを推進しながら、森林が持つ水源涵養や国土保全等の機能を十分に発揮させるため、適切な森林整



洗越し作設の検討状況

備に取り組んでいます。

最近、外材に依存していた合板・集成材メーカーが、ロシアの原木輸出関税の引き上げなどを見込んで、国産材にシフトを進めており、国有林・民有林から製材工場等への安定的な木材供給がますます必要となつていきます。

このためには、間伐等の生産コストを下げ、売り上げを伸ばして収支差を確保し、林業生産活動に活力を与えることが大切であると考えており、当局では、低コスト・高効率な作業システムの普及や間伐材の利用拡大、列状間伐の推進等に積極的に取り組んでいます。

### 低コスト・高効率な作業システムの普及

素材生産コストの縮減、林業の活性化を図るために、路網と高性能林業機械を組み合わせることによって



間伐材(小径木)の大ロット販売

生産性の向上に向け、「簡易な耐久性のある作業路作設」の技術習得を目的とした現地検討会を18年度から実施しています。

今年度は、10月1日(水)、局主催で新潟県内を対象に、県の民有林担当者、森林組合関係者、請負事業者、森林管理署職員等120名の参加で実施しています。他にも署主催や流域活性化センターとの共催等で実施しており、路網を作設するオペレーターの育成に努めています。(今後の現地検討会等の予定は、販売課まで問い合わせ下さい。)

### 間伐材の利用拡大

間伐材等を安定的に販売するため、地域の市場への委託販売、システム



林地残材の整理・販売

販売の協定締結推進などとともに、公共工事での使用等を積極的に進め、一般材から小径材まで間伐材の利用拡大に努めています。  
また、現在多くの製材工場で、乾燥施設に木屑ボイラーを導入しており、工場からはチップ原料が出ていく状況にあることや、今後、バイオマス発電所やバイオマスボイラーなどの燃料として林地残材も注目度が増してくるものと予想されるため、伐採跡地の林地残材(端材・梢端部等)の販売についても試験的な取組を実施しています。  
このような取組を通して、地球温暖化防止対策の一環として間伐材の有効利用を図りながら森林整備を行っていきます。



# 赤谷プロジェクト近況報告

## 「赤谷の森」で自然散策

10月19日(日)、一般の方を対象として赤谷センターが主催する「赤谷の森」自然散策を開催しました。

当日は県内から約20名が参加し、秋の「赤谷の森」に親しんでいただきました。

これは、赤谷センターが取り組んでいる環境教育の一環でもあり、現地へ向かう途中で赤谷プロジェクトの取組についてセンター所長

から説明した後、小出俣林道を往復6km程散策していただきました。



手をつないで大カツラの大きさを実感



センター職員による植物の説明

歩きながら「赤谷の森」の特徴や森林と動物の共生、目にした植物の説明等を行いました。

また、カラマツの漸伐試験地では、科学的根拠に基づいて「赤谷の森」の人工林を天然林へ移行していくための調査研究や自然再生への取組について説明しました。

小出俣林道がある「小出俣エリア」は、植生管理と環境教育のための研究や教材開発と実践の場として、今後も積極的に活用を図っていきたいと考えています。

## 地元小学生へ森林環境教育



三国峠は見事な紅葉でした

10月21日(火)、みなかみ町立新治小学校6年生の三国街道ハイキングに赤谷プロジェクト地域協議会と赤谷センターも同行し、三国街道の歴史の解説、自然観察、赤谷プロジェクトの動物調査の説明などを行いました。

当日は、80名近い児童が参加し、天気も良く絶好のハイキング日和の中、三国峠の新潟県側を出発し、権現清水では水を育む森林の働きについて、三国峠では上杉謙信の関東出兵などで歴史上重要な位置づけを持っていた三国街道の話や、森林限界と豪雪のことなどについて、地域協議会の方が解説を行いました。

赤谷センターでは、赤谷プロジェクトの概要とともに、

センサーカメラによる動物の生態調査について解説し、下山途中で実際にセンサーカメラを設置してもらいました。

新治小学校は、今年4月に猿ヶ京小学校と合併しましたが、旧猿ヶ京小学校の生徒は以前にもセンサーカメラを設置した経験があり、生徒同士で教え合う光景も見られました。

1ヶ月経って、センサーカメラを回収しますが、どんな動物が写っているか楽しみです。これを機会に多くの子供たちが地元の自然に関心を高めてもらうことを期待します。



センサーカメラ設置



# 各署便り

## 「遊々の森」協定を締結

**【百河支署】** 10月1日(水)、白河市表郷の「おもてごう里山クラブ」と当支署は「遊々の森」の協定を締結しました。

協定箇所は、白河市表郷番沢木戸ヶ入国有林内で面積は46ヘクタです。

この場所はナラを主体とした天然林であり、山頂一帯は古来より「天狗山」と呼ばれ親しまれており、遊々の森も「おもてごう天狗の森」と名付けられました。

今後は、教育委員会と連携して地域の小・中学生や地元住民への林業体験や森林観察会を開催するなど、森林の重要性を認識してもらうため



協定書を取り交わす穂積代表(右)と樋口支署長(左)

の森林環境教育の場として活用していくこととしています。

当支署管内では、平成15年に天栄村と西郷村、平成18年に古殿町と同協定を締結しており、今回が4ヶ所目の締結となります。

支署としても様々な形で活動団体と連携・協力し活動していくことにしています。

(広報連絡官 阿久津文彦)

## ボランティアによる スキー場跡地の復旧

**【百光署】** 10月10日(金)、「メイプルヒルススキー場」のゲレンデ跡地において、ボランティアによる荒廃地の復旧作業を実施しました。

平成12年にスキー場が閉鎖され、8年経過したゲレンデ跡地は、カラマツ等の天然更新による植生回復が広範囲にみられる一方、2ヶ所に達する洗掘や、表土が流出して裸地化した箇所が生じています。

昨年開催された有識者による検討会で、土砂流出防止対策の必要性について指摘されたことを受け、今年、日光署において、優先して対策を講じる箇所の検討を実施。その後、ボランティアの参加を得て復旧作業の実施に至ったものです。

この日は土木作業や林業に経験のあるボランティア35名と署員の計42名が参加。



転石を利用した水路及び丸太柵工の作設状況

バックホウで作設した石積による水路の整形、丸太を組んだ木柵の作設、といった洗掘・土砂流出防止対策の仕上げ作業を、2時間程度で終了することができました。

対策を実施した箇所のゲレンデ下部は、今後、表土の安定によって周辺にあるカラマツやススキなどによる植生回復が見込まれます。

今後も経過を観察することにより、森林回復のモデルとなるようにしていきたいと考えています。

(技術専門官 高木義晴)

## 造材研修会を開催

**【棚倉署】** 10月16日(木)、当署管内の入山国有林52林班において、地元林業事業体主催による造材生産技術の



意見交換・採材検討中

向上を目指した造材研修会が、組合全従業員、当署担当職員、森林官を含む70余名の参加で開催されました。主催者挨拶の後、各事業体8社と森林官班の9班に分かれて、用意された9本の試供全幹材について、慎重に採材を検討しました。

その結果、各班の採材方法に違いがある事が解り、最も有効な採材方法について活発な意見交換が行われました。また、意見の分かれた試供木は実際に造材し、参加者全員が採材方法の重要性を再認識しました。

午後は地元製材工場の見学を行い、同社の採材方法や加工工程などについて話を聞き、意見交換をしました。

最後に、理事長から「今回の研修で得たことを今後の製品生産事業の有利採材に生かしていく、有意義な研修会であった。」との挨拶がありました。

(販売係 山部洋士)



### 国有林見学会の実施

**【静岡署】** 当署では、例年、富士山国有林に国民の皆様をご案内し、どのような事業を実施しているか、職員が直接現地で説明し、その役割、必要性等について、理解を求めるための「国有林見学会」を開催してまいりますが、今年も、みごとな秋晴れとなった10月17日（金）に実施しました。

32名の参加者と署職員が富士駅に9時に集合して、富士山へと向かいました。途中、雲一つ無く山頂部を白く染めた富士山の絶景に、参加者から驚嘆の声があげられました。

富士山国有林では、まず最初に、日本有数の崩壊地である大沢崩れで、「景観に配慮した治山工法」として、



「景観に配慮した治山工法」の説明

現場で採取した岩石を利用した巨石護岸工を見ていただきました。

次に、昨年実施した間伐箇所に移動し、森林官から間伐の必要性、当該森林の今後の取扱の考え方などを説明し、流域管理調整官が地球温暖化防止の観点から、森林整備の必要性を話しました。

参加者からは「丁寧な説明で良く分かった。国有林を身近に感じた。来年も是非参加したい。」など概ね好評でありましたが「もっと、森林内を散策したい。」との意見もありました。

（広報連絡官 谷山博則）

### つばさっ子秋祭りに初参加

**【下越署】** 10月25日（土）、胎内市立中条小学校のつばさっ子秋祭り（出前教室）に初参加しました。このつばさっ子秋祭りは地域の指導者を中心に40組の教室が設置され、それぞれの教室に約10名ずつの生徒が午前午後に分れ、じっくりと出前教室を学ぶものです。

当署からは木工教室で出店しましたが、おなじみのモックンづくり・しおりづくり・コースターづくり・巣箱づくりなど、一人がいくつも作れるよう材料を豊富に用意した結果、午前の部の小学一年生～三年生は2時間の立ったままでの工作のため途中座らせる予定でしたが集中しているのか誰一人座って作る人はなく、



しおり・モックンづくりに挑戦

講師も驚くばかりでした。

また、午後の部は四年生～六年生でしたが、さすがに上級生です。女子生徒が一人で巣箱作りに挑戦し、みごとりつばな巣箱を完成しました。一方、男子はしおり・モックンづくりに熱中し時代の変化を垣間見る一幕もありました。

ちなみに、今後の参考に他の出前教室をと思いましたが、生徒達の指導に奔走し結局見学会は出来ないほど忙しい出前教室となりました。

（流域管理調整官 富樫仁栄）

### 「国際アウトドア専門学校生」による林業実習

**【下越署】** 10月6日（月）から10月9日（木）にかけ、妙高市内にある「国際アウトドア専門学校」の一年生13名が、笹ヶ峰高原にある地藏山国有林夢見平において、除伐や間伐をは

じめとする林業の体験実習を行いました。

初日は、署長が講師となって「森林・林業の動向について」をテーマとした講話を行い、生徒達から「国内外産の木材価格の状況」や「割り箸の利用について教えてほしい」といった質問がある等、熱心な受講姿が見受けられました。

翌日から行われた実習では、冒頭、作業に当たっての心構えや安全作業の手順、除伐や間伐の必要性について学習した後、実際にのこぎりや草刈り機といった道具を使用して、伸びきった下草の刈り払いや形質の悪い侵入木等を伐倒する等、慣れない作業に四苦八苦しながらも、実習の終わりに「貴重な体験ができて良かった」といった声が聞かれました。

（流域管理調整官 山下 聡）



「国際アウトドア専門学校生」の林業実習



# 森林官からのおたより

下越森林管理署 村上支署 館腰森林事務所

森林官 鈴木 暁 亜



鮭漁の最盛期を迎える三面川

当森林事務所は、鮭が遡上することので有名な三面川みおもてがわが流れる新潟県北部の村上市（旧朝日村）に位置し、山形県境までの朝日山地一帯約3万3千畝の国有林を管理しています。管内の人工林は1割程度で、スギが大部分を占めています。残り9割は天然林で、11月下旬から5月下旬まで雪で閉ざされるため、ブナを始めとし、トチノキやケヤキ、ミズナラなどの原生的な森林が残されており、朝日連峰と呼ばれるこの



「さけの森林づくり」ボランティアの皆さん

地域一帯には、多様な動植物が息しています。

このような森林生態系を維持・保護・保存することを目的として、平成15年3月に山形・新潟にまたがって全国最大規模となる約7万畝の朝日山地森林生態系保護地域が設定され、ボランティアによる巡視員の方々が保護管理活動を実施しています。

また、管内2万畝の朝日山地内には、山形県の鶴岡市と村上市を結ぶ県道（朝日スーパーライン、総延長52.1キロメートル）が縦断しています。



スーパーラインより朝日山地を望む

毎年7月から11月上旬という短い期間のみ通行可能になっていますが、沿線には三面ダム湖に浮かぶ二子島森林公園や、全国水源の森百選に選ばれたブナの原生林、新潟景勝百選に選ばれた県境の展望箇所などがあり、紅葉の時期などには県内外から多数の行楽客が訪れます。

森林事務所の大きなイベントとしては、平成12年度に、三面川上流の国有林約284ハクを「さけの森林」として、さけの森林づくり推進協議会と協定を締結し、毎年ボランティアと緑の少年団が沢山の鮭が三面川に戻ってくることを願いながらブナの植樹を行っています。

また、旧館腰苗畑跡地においてはブナ等の植樹を行い、平成17年度以降は「ふれあい里山の森」と名付け



「ふれあい里山の森」体験

て、小学生及び一般市民等を対象に炭焼き体験等の森林環境教育を行っています。

森林官として昨年初めて当森林事務所に着任し、地元の方言や現地の把握、更には大量に生息するヤマビルに苦労させられたところです。

今年度は、今後5年間の森林計画を立てるための予備編成の実施期間になっており、図面片手にデジカメを持って、伐採及び更新予定箇所の把握など、通常業務と並行して外業及び内業に頑張っています。

2年目となり業務や私生活にも少しゆとりが出てきたところですが、安心することなく職場の諸先輩のご指導や森林ボランティアの皆さんのご協力を得ながら3年目を迎えたいと考えています。



# 私の視点

## 天城山の懐に抱かれた「昭和の森会館」

昭和の森会館 支配人 土屋 和代



「道がつづら折りになって、いよいよ天城峠に近づいたと思う頃、雨脚が杉の密林を白く染めながら、さまざま早い早さで麓から私を追って来た……。」

有名な川端康成の「伊豆の踊子」の冒頭の部分です。天城隧道は今もひんやりとして当時の雰囲気を残しています。隧道へ行くまでの道は昔ながらの砂利道で、この道を歩いていると、慌しい日常から開放された気持ちになります。



昭和の森会館

「昭和の森会館」は、その天城峠の隧道から修善寺方面に車で10分程のところにある、道の駅「天城越え」としても多くのハイカーや観光客に利用していただいております。

昭和天皇在位50年を記念して、昭和天皇にゆかりの深い天城山自然休養林（国有林）が、昭和53年3月31日に「昭和の森」に指定されました。その基幹施設として「昭和の森会館」が昭和55年7月にオープンしました。

伊豆半島は、自然、詩情にあふれ、多くの文学者も訪れており、昭和の森会館は天城山の林野に関する「森の情報館」と伊豆に関わりのあった作家の資料を集めた「伊豆近代文学博物館」の二つの博物館からなっております。



森の情報館

「森の情報館」は、平成19年3月に静岡県により、今までの資料を生かしながら新しい展示物も加えてリニューアルオープンしました。入館料は無料となっておりますので、気軽に入館していただきたいと思っております。伊豆森林管理署からお借りして

いる樹齢千年にも及ぶ神代檜や樹齢七百年余りの神代杉の実物樹幹、また、明治時代の「貸地に関する書類」など貴重な資料を展示しております。

「伊豆近代文学博物館」は、天城出身の井上靖の生い立ちや、井上文学と天城との深いつながりを解説しており、川端康成を含め、伊豆にゆかりのある作家百名程の資料を、伊東、下田など伊豆をいくつかのエリアに分けて紹介し、地理的にわかり易い形で展示しています。周辺に多く点在する文学碑やゆかりの場所も紹介しておりますので、立ち寄られた方が伊豆散策を楽しむ手助けになればと思っております。文学館を出ると庭園が広



伊豆近代文学博物館

また、国道414号線をはさんだ向かい側の山の斜面では、4月〜5月にかけて約一万本の石楠花が咲き誇ります。標高の高い天城の森の中であるからこそ、毎年きれいな花を咲かせることができるのだと思います。この天城グリーンガーデンも入園料が無料となっておりますので、是非お立ち寄り下さい。

豊かな天城山の森林の中にあり、訪れた方がほっと一息つける場所として、これからも「昭和の森会館」の維持管理に努めて参りたいと思っております。



グリーンガーデンの石楠花



# 子ども樹木博士 認定活動を実施

関東森林管理局では、子供達に楽しみながら樹木の名前を覚えてもらい、森林や林業にも興味を持ってもらうようと「子ども樹木博士」認定活動を毎年実施しています。

10月21日(火)、安中市立九十九小学校の三・四年生を対象に小根山森林公園で、翌22日(水)には前橋市立岩神小学校の三年生を対象に局前庭で実施しました。



クイズに答える九十九小児童



ミニいす作りに挑戦中の岩神小児童

「られるものはなんでしょう」といった問題に、参加児童は元気よく答えられました。

また、実際に木の幹や葉に触れな

が興味深そうに樹木の名前を覚えていました。

局では樹木博士の後に木工教室を行いました。間伐材のミニいす作りに挑戦しました。「金づちを使うのは初めて」という児童もいましたが、友達と協力し合って立派な作品を作り上げました。

閉会式で、成績優秀と認められた児童全員に「子ども樹木博士」の認定証を渡すと、歓声とともに「楽しかった」「またやりたい」等の声が聞かれました。両日とも天気に恵まれ、大変充実した活動となりました。

(指導普及課)

## 一枚の写真



山荘の除雪作業

昨年8月、尾瀬国立公園が誕生、今年8月には当支署管内の檜枝岐村をメイン会場に常陸宮さまご夫妻をお迎えして、「自然公園ふれあい全国大会」が開催され、今年の尾瀬も多くのハイカーの心に「夏の思い出」を刻み込んだことと思えます。

この写真は、そんな夏の尾瀬とは対照的な「冬の思い出」に残る旧尾瀬山荘(現在、環境省所管)の平成7年の除雪作業のひとつです。

尾瀬山荘は尾瀬沼の東岸に存在し、尾瀬地域を管理する職員の宿泊などに利用されてきました。当時はまだ平屋造りのため、冬の間はスッポリ雪に埋もれてしま

倒壊の危険があり降雪がピークに達する毎年2月上旬頃、5〜6名の職員が2泊3日の行程で除雪を行っていました。

署から山荘へは、檜枝岐村まで車で1時間、村の雪上車で沼山峠まで2時間、さらにスキーで尾瀬沼まで2時間の合計約5時間を要します。

1日目は除雪の準備で終了、2日目から本格的な除雪作業となつて、屋根に積もった4〜5センチの雪を降ろし、その雪を周辺に片付ける作業で1日が終わり、3日目に片付けをして帰路に着き、夕方、署に到着するという心身ともに大変な作業でした。

また、その年の降雪状況によつ

ては年2回の除雪となったことや、作業を終えた次の朝には、一晩で降ろした雪と同じ位の新雪のため、急ぎよ帰署を延長ということもあり、除雪隊のメンバーによって天候が変わるといようなエピソードも残っています。

そんな尾瀬も今は一面白銀の世界、再び元気なハイカー達の声が聞こえる春を、静かに待っているところですよ。

(南会津支署 広報連絡官 高橋昌明)

発行所 関東森林管理局  
編集 総務課

TEL (027) 210-1158  
FAX (027) 210-1159

